記事紹介
糟谷君虐殺抗議特集
新左翼　列島新報
共同編集

新左翼

1969年
11月15日
第44号
月3回5，15，25日発行
1部15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区水庄川崎町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

官憲の糟谷君虐殺を糾弾する！

惨虐きわまる弾圧
訪米阻止闘争の圧殺はかる

十七日の佐藤訪米に反対して、安保粉砕のうねりが北海道から沖縄まで、日本列島を大きくつつみこもうとしているとき、これに恐怖し闘争に立上った学生・労働者をことのほかにくみ、白色テロを公言してきた佐藤自民党政府は、糟谷孝幸君（岡山大学文学部2回生21才）を殺害した。十三日夜大阪北区扇町公園で「佐藤訪米実力阻止・11月安保決戦勝利全関西労働市民総決起集会」に参加していた際、糟谷孝幸君は、機動隊に逮捕された後、彼らの集団的なリンチをうけ、撲り殺された。

安保体制粉砕闘争のために若い青春のいのちを捧げた糟谷君に対して政府、警察当局、ブルジョアマスコミは一斉に中傷をあびせる一方、さらに犠牲者をだすことも辞さずと、けん銃の使用、自衛隊出動をもって、労働者・学生・市民は、ますます佐藤政府に対している。しかし労働者・学生の闘争に恫喝を加え、佐藤訪訪米阻止、安保粉砕・沖縄解放の闘いに立上り、広範で激しく粘りづよい闘いを展開している。する怒りをたぎらせ、

六〇年安保以来安保闘争に導い青春の生命をささげた樺、山崎、滝沢、望月、津木、糟谷君の六人の遺志は日本人民のなかにうけつがれ、彼らの英雄的闘いは、日本人民のなかに永遠に記憶されるであろう。

故糟谷孝幸君

糟谷孝幸君が機動隊による集団リンチのあと、行岡病院で死亡するまでの経過は、関西救援センター、弁護士、医師などの話を総合すると大体次のようである。

糟谷君は十三日午後六時二十分から三十分の間に、扇町公園横の道路、水道局前で逮捕された。逮捕した警官は特別機動隊第二小隊第三分隊の荒木幸男、赤松昭雄、杉山晴実の三名でいずれも寝屋川署からこの日の弾圧のためにかり出されてきたものである。

糟谷君はこの三名の機動隊員がもしくは他の機動隊員によって警棒で乱打された後、歩かされて約四百mはなれた箱根署まで連行された。彼は警察で「獣色しまず」とだけ答え、その後死にいたるまで、権力に対して一言も語らず階級戦士としての名誉と誇りを守りぬいた。

頭に死にいたるまでの傷を負っている糟谷君に対して、警察は徒歩で箱根署まで連行したばかりか、一時間近くも警察にとめておき、何の治療もしなかった。そして糟谷君が意識不明になってから病院（北区浮田町）は、前々から警察御用病院として評判が悪く、箱根署とは特に密接な関係をもった病院である。院長は自民党の府会議員であり、自民党の代議士とも親交がある。

関西救援連絡センターが、糟谷君のことを知ったのは十三日夜の十一時近くであった。ただちに医師と弁護士に連絡し、糟谷君にあった。時刻は八時二十分から四十分の間らしい。脳震盪は最初の処置が一番大事であるにもかかわらず、警察は歩かせたり、取調べを行ったのである。

糟谷君がつれてゆかれた行岡病院（北区浮田町）は、前々から警察御用病院として評判が悪く、箱根署とは特に密接な関係をもった病院である。院長は自民党の府会議員であり、自民党の代議士とも親交がある。

十四日午前一時四十分ごろ、梅島正法弁護士、為岡亨医師と救援センターの数名が行岡病院におもむいた。この時はまだ糟谷君の身元はわからず、救援センターの弁護士は、弁護人に選任してもらうため、逮捕されていようと面会する権利があったし、頭がい骨骨折という生命にかかわる傷のため、医師としても当然通せきする必要があった。

ところが行岡病院側は、看護婦をだして「警察からあずかっているんですからあわせるわけにはいきません」の一点ばりで、全くの玄関払いをくわせようとした。弁護士、医師は一時間近くの押し問答のあとに続いた。

扇町公園に三万人
機動隊に怒りの火炎ビン

十三日、大阪では雪まじりの寒さから市内の扇町公園に反戦青年委、全共闘、高校生、ベ平連、総評系労働者などが結集し、夕刻には三万人を上回る人びとが続々と集った。

扇町公園には例によって機動隊が荷物をもった人びとを片っぱしから取調べ、検問を行った。六〇年安保闘争の規模をこえる大規模なストライキを決行した労働者、佐藤訪米を実力で阻止する固い決意をもった人びとはそれぞれ集会を開き、現地闘争を勝利させようと誓いあった。

六時すぎ、第一回目の集会を終った総評系の労働者がまず扇町公園からデモに出発した。ヘルメットの人びとはそのところで、突然大阪地検の検事の乗っていた業用車めがけて火えんびんを投じた。続いて二本三本と火えんびんは機動隊の隊列のまんまえであるいは後方でたてつづけにもえあがった。たちまちあたりは騒然となり、その機に労働者、学生は公園内から猛烈に石を投げつけた。たじたじとなった機動隊は、大楯のかげにかくれてあとずさり。そこへ火えんびんの火とデモを開始した。機動隊は逃れようとする人びとを追いかけ、ふみつぶし、けとばし、逮捕した。

約三十分後、デモ隊は再び続々と集った。どこにこれだけいたのかと驚くほどの人びとが梅田新道の道をうめつくし「佐藤訪米阻止！」「佐藤内閣打倒！」「安保粉砕」などのシュプレヒコールがあたり一帯にひびきわたった。

その後もデモ隊は弾圧のスキをみてはジグザグデモ、フランスデモをくり返し御堂筋を中之島まで進み、肥後橋から中央郵便局まで果敢なデモをくりひろげた。

解散地点の中央郵便局から大阪駅一帯はデモ隊や市民でいっぱいになり、ここでも火えんびんが投げられ、深夜まで騒然としていた。

警棒による撲殺は明白
権力犯罪立証に協力を

糟谷君の遺体は十五日午前一時半から阪大病院で阪大医学部法医学教室の松倉教授が執刀し、司法解剖に付され、五時半に終了した。これには梅島・松本両弁護士をはじめ、関西救援連絡センター推薦の佐藤医師（京大医学部）などが立会った。

この解剖によって死因は脳機能障害、脳挫滅、脳幹損、頭部打撲である。遺体の情況は、硬い鈍体による打撲、皮下出血右上肢十数ケ所、同右下腿部十数ケ所、臀部出血一ケ所、頭頂部直径十センチの円形出血。頭蓋骨々折、亀裂骨折はともになく、骨の癒合部にずれが生じていた。

松本弁護士　解剖結果やテレビ、医師の判断などから、現在考えられることは、糟谷君を警官である下手人がうつぶせに地面をおさえつけ、左手で彼の腕をねじふせ首をつかまえ、右手で警棒で乱打したものとみられる。

あの情況で学生が奪還にいくことは考えられないが、この推定は警察の学生が糟谷君を奪還にきたので棍で防戦したという発表と一致する。頭部の二つの傷が半行してついていたことは、糟谷君をおさえつけて動けないようにしてなぐったことを示している。身の傷の場所からみても、うしろから彼をくみしいたことがわかる。

解剖所見の凶器は鋼管ということは、鋭利な凶物でないということだ。

このことで警察が殺人事件をデッチあげる危険性は、彼らが火炎ビン説を流していることからみても、ありうることなので目撃者をさがし、困難ではあるが報道機関の協力をも求めて、警察の現場逮捕時の暴行の事実を証明し、彼を逮捕した三人の警官と指揮者の責任を追及したい。彼らを告発し、ひ免訴追にまでもっていきたい。そのために、当時の目撃者、関係者に広く協力をよびかける。関西救援連絡センター準備会（北区浪速町電話三七二—〇七七九）にしらせてほしい。

倍する怒りを持って 佐藤政府打倒、安保粉砕に決起せよ！

直ちに抗議行動
大阪15・16連続してデモ

国家権力の糟谷君虐殺に対する怒りと抗議の声はただちに全大阪でわきあがった。

十五日午後二時から、関西べ平連、十一・一三統一実行委員会の共催で「糟谷君虐殺抗議！佐藤訪米阻止！」の集会が北区中之島公園で開かれた。

雨の降る中を腕に黒い喪章をつけた学生、べ平連、労働者、市民が続々と集まり、赤旗はすべて喪章がつけられ、雨にぬれてはためいた。

集会は最後まで権力と闘いぬいた糟谷君に対する深い哀悼と国家権力への憎しみをこめて一分間の黙祷を行ったのち、十一・一三実行委、関大全共闘、弁護団、べ平連、大経大全共闘、中核派学生、全損保反戦、安保全学協などの代表が国家権力を糾弾し、徹底的に真相を明らかにすると同時に、糟谷君の死を弔うのは、十七日の佐藤訪米阻止に全力をあげてとりくむことであると決意をのべた。

糟谷君と共に闘ってきた岡山大学全共闘の代表は、糟谷君を虐殺した国家権力への怒りをこめて次のように語った。

「糟谷君は、岡大全共闘が結成されて以来、全学ストの中で法学科二回生の学生として、積極的にすぐれた活動を行ってきた。九月以降の機動隊導入に対しても断固として闘いぬき、十・二一の闘いにも参加した。十一・一三の街頭実力闘争を最前線で最後まで闘いぬいたことを、共に闘ったものとして報告したい。

すべての人が知っているように当日、権力の暴虐きわまりない弾圧の中で、機動隊は抵抗力のない糟谷君に対して殺人的リンチを行った。このことは動かしがたい事実である。

そして、この弾圧は何よりも十七日佐藤訪米にむけて決戦として闘いぬこうとしているすべての人びとに対する権力のどう喝である。

糟谷君は官憲の殺人的暴行と不当にも数時間にわたって不当な仕うちを加えた警察と、御用病院によって虐殺されたのである。官憲の卑劣な攻撃に対して糟谷君は権力への抗議を最後まで貫徹し、自らの堅固な思想性を貫いた。

今日、われわれの弾劾と抗議に対して権力は一貫して黙殺し、ジグザグの回答を与え、糟谷君虐殺を闇に葬ろうとしている。今こそ、真相を明らかにし、徹底的に殺害者を追求し、国家権力を弾劾しぬかなければならない。

当面、権力の虐殺、殺人行為と強権的弾圧体制をうち破り、実力闘争で佐藤の訪米を阻止する」

集会後、参加者は「糟谷君虐殺に抗議する！佐藤訪米実力阻止！」の横まくと、糟谷君の遺影を先頭に、中之島から中央郵便局までデモ行進した。

また、その後、六時から大阪駅東口広場での抗議集会が開かれ多数の労働者、学生、市民が参加。

十六日、糟谷君が虐殺された扇町公園で午前十一時から反安保実行委主催の訪米に反対する集会が開かれ、多数の労働者が、糟谷君に深い哀悼の意を現わし、国家権力を糾弾した。

関西救援連絡センターの森島弁護士は糟谷君の逮捕から死にいたるまでの経過を報告し、激しく警察と病院を糾弾した。

大阪地評の平垣事務局長ほ、糟谷君に深い哀悼の意を示すと同時に国家権力の暴虐行為を糾弾した。また、日共修正主義が樺さんの時と同じように今回も口汚く誹り、労働運動に分裂を持ちこもうとしていることも厳しく糾弾した。

私は見た！
火の中つき倒す警官

まったくひどかった。あれは確か、デモの青年達が二度目の攻勢に出た時だったと思う。道路一ぱいに阻止線をはっていた機動隊員が、突然一勢におそいかかった。もちろん今までにも、デモ隊に機動隊がおそいかかるところは見たことがあるが、今度のようにひどいのは始めてだ。逃げ遅れた青年を火炎ビンの火がもえている上に横で突き飛ばし、メチャクチャになぐったり、けったりしていた。

歩道で私や他の人が、「ひどすぎる」、「殺すつもりか」などと思わずつぶやいているとまわりにいた私服警官が、ジロリとにらんで、「立ち止まるな」と私たちを追いちらした。だからその後のことは知らないが、ともかく、この日の機動隊員は皆、不意を突かれたためか非常に興奮していたようで、死者が出るのも不思議がないほどそのやりかたも常軌をはずれていた。（談）

同志糟谷孝幸君の虐殺を満身の怒りこめて弾がいする

共産主義労働者党中央常任委員会

プロレタリア学生同盟中央政治局

同志糟谷孝幸君の虐殺を満身の怒りをこめて弾がいする。

日本帝国主義と佐藤内閣はまたもや、一人の闘う学生の生命をうばい去った。糟谷孝幸君（岡山大学法文二回生21才）は、大阪の地でプロレタリア学生同盟の旗の下に「11・13佐藤訪米阻止・佐藤帝国主義内閣打倒」の大闘争に参加し、荒木幸男ら三名の機動隊員の残酷極まりないリンチをうけて負傷し、重傷のまま逮捕連行されたが、十一月十五日午後九時、十数時間の意識不明状態のまま死亡した。

虐殺された糟谷孝幸君は、樺美智子、山崎博昭、由井同志につぐ反帝プロレタリア闘争の共同の殉難者である。警察当局は山崎同志の場合と同じく、国家権力の手による虐殺を隠ぺイし、あたかも味方によって暴行されたかのような悪質極まるキャンペーンを展開している。われわれは糟谷同志の虐殺に対して怒りをこめて抗議し、佐藤内閣の責任を糾弾するものである。

権力当局がどのように居直り、強弁しようとも、糟谷同志の死は逮捕時もしくはその直後の十一月十三日午後六時半前後に彼を逮捕し、警棒をふるって乱打した機動隊員三名の残虐なリンチによって、もたらされたものであることは明白である。更に又、われわれの調査によれば、権力及び行岡病院が十三日夜、糟谷君の意識が混濁し始めてからかなりの時間にわたって、彼を放置し続けたことも明らかとなっている。疑う余地なく同志糟谷は、佐藤政府と国家権力のブルジョア法規をも完全に無視した、階級的憎悪とリンチによって虐殺されたのである。

いうまでもなくそれは、沖縄・安保をめぐる今秋政治決戦を、全力をつくして闘い抜いている革命的な労働者・学生・市民の総体に対する、佐藤政府と国家権力の凶暴極まりない弾圧の一環であり、頂点である。

われわれはかかるうちつづく暴挙を断じて許さない。糟谷君虐殺に対するわれわれの回答は、本日から十七日にわたる「訪米阻止」「政府打倒」の闘いによって与えられねばならない。

わが党及び同盟は狡猾極りない敵権力の居直りとフレームアップを断固としてうちやぶりつつ本日から十七日にかけての三日間の激闘をすべての革命的な闘士とともに、同志糟谷君虐殺に対する階級的復しゅう戦として闘いぬくであろう。

一九六九年十一月十五日

同志は倒れぬ

正義にもゆる闘いに
雄々しき君は倒れぬ
血にけがれたる敵の手に
君は闘い倒れぬ
プロレタリアの旗の為
プロレタリアの旗の為

警察御用か行岡病院を暴く
―曽根崎〇号の体験記―

11・13デモで岡大生糟谷孝幸君は、機動隊の野蛮な集団リンチにより、ついに十四日午後九時その短い一生を終ってしまった。彼の死は、その死場所となった行岡病院の、警察権力にゆ着されみにくい姿を一段と白日の下にさらけだしている。これまでも行岡病院といえば、北区の住民の間では知らぬ者がない程、自民党の有力な足場で、警察と密着しかつ地元のボスや暴力団などともつながっているという、黒いうわさがつきまとっていた。本紙ではここに、最近の闘争の際、糟谷君と同じように機動隊に逮捕・暴行され、行岡病院にかつぎこまれたA君の経験を紹介する。

機動隊によるデモ弾圧のなかで「投石した」などといいがかりをつけられ逮捕された僕は路地にひきづりこまれ、何人もの機動隊員から殴るけるの猛烈なリンチをうけた。不当逮捕を抗議するたびに「文句があるなら警察署でいえ」と何度も殴られた。出血のひどかった僕は警察署に連行された後、パトカーで行岡病院にかつぎこまれた。

鼻のところを靴でけりあげられたため顔面の出血が特にひどく、はげしい頭痛と嘔吐にみまわれ、病院で縫合その他の手当をうけ、絶対安静ということで入院となった。制服警官数人の監視の下に、僕は鈍い頭痛のままいつの間にか寝入った。深夜何本も注射されたことだけはおぼえている。

翌朝いきなり若い男の声で「おい、お前。名前なんていうね！」という敵意にみちた声でもうろうとしていた眠をさまされた。眼をあけて生意気そうな眼鏡をかけた若い男に「どこの人？」ときくと「俺か、俺はこの病院のもんや。お前の名前と住所をかきこまんとあかんのや」と、制服警官をうしろだては威丈高になって詰寄ってきた。

その虎の威をかりる狐の態度に「曽根崎〇号」といってあとは黙殺したが、彼は一段声をあらげて「なにい！そんな名前の戸籍があるんか。お前ら勝手に暴れくさってかつぎこまれてきたくせに…」と、その他卑しい言葉をいっぱい並べたが、こちらが相手にしないので、もう一人の同じく逮捕されていた青年のところにいって「おい、こら、おきんか。お前の名前なんていうね」と怒鳴った。

その青年も「曽根崎〇号」といって、まったくそいつを黙殺したので、その事務員はかっかっとしてきて「お前ら絶対に名前をいわすからな。あとでもう一回くるぞ」と、なぐりかからんばかりのせりふを残してでていった。制服警官は全く無表情に、再び漫画週刊紙に眼をおとした。

昼近くになって巡回にきた医師が、毎日通院加療することを条件に、警察官（主任）に僕らの退院をいい渡した。翌日留置所から手錠をかけられたまま、再び行岡病院に治療にきてふと傍にあったカルテに目をやると「デモに参加中頭部及び顔面に投石をうけた…」などと書いてある。

何をもとにこんなデタラメがかいてあるのか詰問すると、医者は「自分は知らない」という。それで顔面のケガは「警察官の暴行をうけ…」と訂正しろと何度もいった。帰りに念のため書直したというカルテをもう一度みせてもらうと、たしかに僕のいう通り書直してあったがなんとわざわざカッコ付きで「本人いわく」と書加えてあった。

「一体この受傷状況のところはもともと誰いわくだったのか」ときいたが、医師は知らないの一点ばりだった。僕も最初に僕を治療した医師の顔を覚えていないのでしかたなくそのまま帰った。

あとで診断書を念のためとってきたが、それには「全治七日」と記してあった。僕を取調べた刑事と検事の手元には〝被害者警察官〟の診断書（行岡病院発行）があって、それには「左手薬指挫傷通院加療十日」とあった。僕はその被害者なる機動隊員を警察の刑事部屋で、刑事が「あれが君たちを逮捕した警官だ」といったので、ちらとみると、左手の中指あたりにほう帯をまいていただけだった。

僕の方はというと、石があたった頭の傷以外はすべて機動隊のリンチをうけたもので、それは顔面を三針ぬい、そのほか左手首、左足関節部、右足首それぞれ負傷して、湿布やほう帯をきせられていたのである。特に顔面の縫ったところは、鼻をいためて苦しかった。眼ぶたが赤く充血して、顔のはれは七日すぎてもなかなかひかなかったのである。

逮捕されてから五日めに僕は釈放された。七日めに抜糸すると行岡病院ではいっていたので、顔の裂傷がちょっとでもかわると、ぬったところがまだいたむので、僕は別の病院でみてもらうと、まだ早いということで、さらに七日、すなわち負傷してから二週間も治療に通ったのである。

このように行岡病院は誰がみても明らかにちがう程度の傷でも、警察側に有利なように診断書やカルテを作るのである。病院というより、負傷者を治療するというよわみにつけこんで、警察の手先になって弾圧し、交通事故等でかつぎこまれる急救患者から金をまきあげるという、警察権力に寄生し、人民から生血をしぼりとっているのが行岡病院である。